

「内鮮結婚」の文学：張赫宙の日本語作品を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00000474">https://doi.org/10.14945/00000474</a>

# 「内鮮結婚」の文学

——張赫宙の日本語作品を中心に——

南 富 鎮

## 一 はじめに

日本人と朝鮮人による恋愛と結婚は明治・大正期を経て、昭和期になるとさまざまな形で描かれることになる<sup>(1)</sup>。内鮮結婚の増加と戦時期の国策にあいまって、内鮮結婚の文学言説は増大したのである。また作者自身が内鮮恋愛を経験し、内鮮結婚にいたるケースも生まれてくる。たとえば、張赫宙(1905～1997)がそのようなケースにあたる。

張赫宙は一九三二年二月、『改造』誌に「餓鬼道」で朝鮮人としては初めて日本文壇に登場した。以降、朝鮮を題材にした多くの作品を書き、一九三六年六月には朝鮮大邱から東京に創作拠点を移す。東京生活のなか、張赫宙は朝鮮人の先妻と別居し、日本人の野口桂子(桂子は通称で戸籍名は、はな子)と事実上の結婚生活にはいる<sup>(2)</sup>。当時でいう内鮮結婚である。こうした彼自身の内鮮結婚が一つのきっかけになったであろうか、張は内鮮結婚と恋愛についていくつかの作品を書いている。いずれも張自身の内鮮結婚以降に書かれたもので、「憂愁人生」(一九三七・一〇)、「雰囲気」(一九三八・六)、「処女の倫理」(一九三九・四～八)などがそれである。さらに張は彼自身が抱えた内鮮結婚のさまざまな問題を、戦後に

なつて一連の自伝的小説「遍歴の調書」(一九五四・一一)「異俗の夫」(一九五八・五)「嵐の詩」(一九七五・四)の中  
も書いている。

本論では、張赫宙の作品の中で内鮮結婚の諸問題が扱われている作品を取り上げ、内鮮結婚のもつ問題点を考察し、ま  
たそれを通して張赫宙文学の側面を明らかにしていきたい。

## 二 「憂愁人生」

「憂愁人生」は、一九三七年一〇月、『日本評論』に発表され、のちに作品集『春香伝』に再録されたものである。

一九三六年六月、日本に創作拠点を移した張赫宙は、「月姫と僕」(一九三六・一一)、「愛怨の園」(一九三七・五)など  
の、張特有のじめじめした私小説風の作品を発表するが、いずれも酷評を受ける。<sup>(3)</sup>「憂愁人生」はその反省からであろうか、  
虚構性の強い創作になっている。また作品背景も今まで一貫してきた朝鮮を離れ日本を舞台にしている。作品の梗概は次  
のとおりである。

「私」は屑屋の朝鮮人父と日本人母の間で生まれた。父は北九州で炭坑労働者の時に同じ工場の女工である母と知り合っ  
て結婚した。その後、父は炭坑を追われ日本各地を土方や屑屋として転々とし、「私」も父に連れられ幾度ともなく転校を  
重ねる。家では母と父の喧嘩が絶えず、「私」は周りから「合の子」「鮮人」「盗つと」「ぼろ屑」と、酷い差別を受ける。  
そうした日が続くなか、父は昔の朝鮮人の子分たちに頼まれて朝鮮人を差別した日本人を懲らしめることになるが、大喧  
嘩のすえ日本人が殺され、刑務所に送られる。それで周りの差別は一層酷くなり、母は私と妹をつれて旅館の女中などを  
転々とする。生活に困った母は実家に援助を求める。母はじつは裕福な家庭の女一人っ子だったが、好きな従兄弟との結

婚がかなえられず、嫌いな従兄弟との結婚を強制されて家出をしたのである。好きだった従兄弟はまもなく病死し、家を出た母は酌婦などを転々としているなか、炭坑で朝鮮人とも知らずに父に出会ったのである。

母は実家の財産を相続した従兄弟の援助を求めて実家に戻ったが、周りの親戚からは冷たくされ、頼みの従兄弟とも大喧嘩をしてしまう。親の財産を全部養子の従兄弟に取られたと思った母は怒り狂い、妹を抱きかかえて水死する。一人取り残された「私」は南朝鮮の父の兄の家に預けられる。伯父の家で普通学校を卒業した「私」は、仕事をもとめて父の知人を頼りにまた東京に戻り、鉄工所に就職する。ちやうどそうした時、父は釈放されトンネル工事場で働き、「私」のために夜間商業学校の学費を送ってくれる。しかし、間もなく父はトンネルの落盤事故で生き埋めになって死亡する。父の死の代償としてもらった五十円で葬儀を済ませ、父と母と妹を合葬する。その後、途方に暮れた「私」は小学校時代に唯一親切にしてくれた先生を懐かしがって山間の小学校を訪ねる。昔の先生は転勤しておらず、「私」は校庭の隅で周囲が暗くなるまで、自分の苦難に満ちた人生を哀しく振り返る。

このように、「憂愁人生」は日韓の混血児として生まれた「私」が経験する困難と差別の、まさに憂愁に満ちた人生を綴ったものである。「私」の不幸は父母の内鮮結婚による混血に起因する。

父が朝鮮人だとは知らずに結婚した母であるが、私と妹が生まれるにつれ、混血児の問題がいよいよ深刻化する。「私」は幼い時から周りから「鮮人」「ぼろ屑」「盗つと」「合の子」と呼ばわれ、「鮮人の血」を引いているから凶暴だとか、言われる。それに「私」は「わしかつてりつばな日本人ぢや。わしのおつ母さまはお前えらのと同じ日本人だわい」と反論するものの、「お袋は日本でもおやぢは鮮人だい。屑屋のおやぢだい」とひどくからかわれる。学校でもそんな差別が続くなか、四年生の時に母の実家に近いところの小学校に転校する。また差別といじめが始まると心配したが、その担任先生は朝鮮人差別を無くすために日本人風の名前に改名するよう勧める。

「実はこの学校にも朝鮮の方の子弟が十幾人かゝりましてね。初めての中は子供同士うまくゆかなかつたので、考へた末、お子さん方にはみな内地風の苗字をつけるやうにしたんですよ」

さういつて、先生は半島出身の子供を何んな方法でまもつたかなどとを話した。

「お子さんには何ういふ苗字がよいでせう。もし、適当だと思はれるのがありましたらそれに致しますから」  
先生にさう訊かれたので、父は暫くまごついてゐたが、

「英一ちう名ですから……さうですな、わしは山田と名乗つてゐるし……」  
などと話してゐたが、

「あ、いい苗字がごわす。小坂、小坂英一ちうのは如何でかせう。小坂ちうのは、へへ、家内の里方の苗字でして……」  
と、父は勢ひ込んで、母が内地人で、里はここからそんなに遠くないところにあるんだとか、そんなことを如何にも誇しげに喋りつづけた。父が母のことをあんなにも自慢さうに吹聴するのを私は見たことがなかつた。

小坂英一に改名した途端、周りからの差別はなくなり、「私」は「あまりの好環境の出現に私自身むしろ戸惑を感じる程」であつた。その代わり、「私」は父のあまりにも朝鮮的な存在に「水に浮いた油を思はせ」、「体臭も顔も音声にも毛嫌ひを感じ」る。「私」は父への嫌悪と母への親近感を強くもっているが、母からはいつも冷たくされる。父が暴力事件を起こし、刑務所に収監されてから母の態度は日増しに険悪になる。

母はその後はずつと病弱のまま私達に当りちらすときが多く、一日中一しよにゐてもやさしい言葉一つかけてくれず、妹がおつぱひに触りでもすると、きつい眼でにらみながら、お前等さへ生れてなかつたら、あんなものとはとう

に別れただらうに。あんなものとしよになつた為に自分の生家にも帰れなくなつたと、叫んでは、私達の存在すら呪ふかに見えた。私は母の心情を解せられなくなかつたが、母のさうした冷淡さは孤児になつたよりもずっとずつと私は淋しがらせた。私は妹と二人して諸処を物乞ひして歩く哀れな幻想をさへ描くのだった。

母の冷たい態度は「私」と妹が混血児ということにあつた。父が刑務所に収監されてまもなく、母は伯父に訪ねて援助を要請することになる。それに「私」は大喜びする。伯父が私を引き取ってくれば、金英一ではなく、小坂英一という戸籍が取得でき、小坂を堂々と名乗ることができるようである。しかし、伯父の援助は受けられず、母は伯父との大喧嘩の後、妹を抱いて入水自殺をする。いきなり孤児になつた「私」は、南朝鮮の伯父のところへ預けられる。戸籍が朝鮮の伯父のところにあつたからである。金英一にもどつた「私」は日本人の小学校から朝鮮の普通学校に転入し、六年を卒業する。卒業と同時に校長先生をお願いして就職活動をするが、朝鮮人ということでもどこの店からも断られる。日本の戸籍さえあれば就職は可能だったが、朝鮮の戸籍のゆえ雇ってもらえない。「私」は朝鮮籍であることを怨む。

私はそのときばかりは自分の苗字がなぜ小坂でなくて金なのかを非常に怨んだ。私はふと小坂村の伯父さんのことを思ひ出した。彼はあんなにそつけなく私達を追ひはしたが、たとひ私達の面倒をみるのをこぼんでも私の籍だけでも彼の方へ転籍させてくれたら、こんな場合どんなに都合だらうと考へた。だが、母の自殺を思ふと、そんなことを思ふ自分が卑屈にみえて、自分の弱氣に腹がたつのだつた。

父が朝鮮人であるため、母が日本人であるにもかかわらず、「私」は内地籍を得ることができない。しかし一方で、母が

日本人ということで、周りの朝鮮人からは日本人のように扱われる。「私」を日本に連れ戻しにきた崔は、連絡船に乗るために渡航許可証のことを心配している。「私」に次のように言う。

「なあに、お前は内地人ぢやねか。小坂と言へばいいぢやないか。お前の顔は内地人そつくりだし、言葉だつてうめえし、なーに訳なく騙されるよ。いや、騙すも騙さないもないさ。お前は元々内地人ぢやねえか。内地人が内地にゆくのに何が悪いか。へツ、畜生奴」

崔は「私」の顔が「内地人そつくり」で「言葉だつてうめえ」ことより、「私」を「元々内地人」だと思う。内地人の母親の血を引いているから当然ながら「内地人」という論理である。単純な血の論理で、戸籍法の発想はまったくなくない。「私」もそれに従って渡航証明書を持たずに日本人の小坂英一と言い通して検査を通り、日本に戻ってくる。しかし、来日間もなく父が炭坑の落盤事故で亡くなり、「私」は孤児になって呆然とする。暗澹とした状態でなんら解決策のないまま作品は終わる。

このように、「憂愁人生」は内鮮結婚によってもたらされた在日朝鮮人の負の側面が描かれている。周囲の反対と朝鮮人に対する差別があり、またその負の多くの側面が二世、つまり混血児によって引き起こされている。混血児に対する日本社会の差別は、親の片方が朝鮮人であるがためにさらに深刻化していく。日本社会で孤立した在日という条件が差別の度合いをさらに深刻化しているといえる。

いっぽうで「私」の不幸を深刻化するもう一つの理由として戸籍の問題がある。進学や就職、あるいは日常生活においても朝鮮人戸籍がごとく不利にはたらく。内地籍を得るためには養子縁組しかなく、「私」もそれを叔父にお願いしよ

うとしたが、断られる。母と妹の自殺もこれが大きな理由になっている。「私」には最後の最後までなんら解決策が見つからない。こうした閉塞的な状況は、日本での日韓混血児を扱っている金史良「光の中に」とも好対照をなしている。

金史良「光の中に」（一九三九年）では、日韓混血児である山田春雄少年の話が展開され、差別の条件では「私」と同じであるが、「光の中に」では主人公の山田少年は最終的に問題が解決され、光の中に出られる希望を抱く。山田少年の場合、父が一応日本籍をもっており、山田少年自身も日本戸籍をもっている。同じ混血児であっても日本籍をもつか、朝鮮籍をもつかによって山田少年と「私」における希望と絶望という最終的な姿が存在しているといえる。それでは朝鮮での情況はどうだろうか。

### 三 「雰囲気」

「雰囲気」は一九三八年六月、『文芸』に発表され、創作集『路地』に所収された作品である。作品は朝鮮の地方都市（大邱）の風俗街を舞台にし、そこに働く一人の女性鈴奴の生活が中心に描かれている。大まかな筋は以下の通りである。

朝鮮人の長星をはじめ日本人新聞記者と朝鮮人青年たちは地方都市の夜の街を飲み歩く。その店の一つに芸者の鈴奴がいるが、鈴奴は不真面目でお金に目がない徐という男に惚れている。鈴奴の徐への傾倒ぶりに資産家で京城帝大出の朝鮮人秋、「民報社」の新聞記者古賀、原尻をはじめ多くの客が不愉快に思う。鈴奴のあまりの没頭ぶりに他の男性たちは全く嫌になってしまふ。しかし、鈴奴は周りの冷たい態度にもかかわらず、徐への思いをますます募らせる。鈴奴と親しい長星は「徐のやうな人は、真面目な恋愛の対手たいてになれるやうな人ではない」と忠告するが、彼女は聞き入れない。そんなある日、川（洛東江）で日本人の船遊びに呼ばれてきた彼女は、ちょうど妓生を連れ出してボート遊びをしている徐を発見



し、嫉妬心で川に身を投げる。幸いに彼女は救い出されたが、しばらく後に彼女は何喰わぬ顔でまた現れる。

「雰囲気」は芸者の鈴奴と彼女をとりまく男性たちの様子に植民地的な風俗を盛り込んだ作品であるが、話の展開はあくまでも鈴奴という特異な女性の恋愛が中心になっている。鈴奴は「島田の頭と長い袂のキモノ」を着ている一応日本人の芸者であるが、実は日本人母と朝鮮人父の混血児である。彼女が料理屋の芸者になったのは次のような事情からである。

これは長星も初耳だったので、「え？　鈴奴の父が朝鮮人かい？」と驚いた。「ええ。はつきりは知らないけど、釜山のさる大尽の胤ださうですよ。」燕々は、鈴奴の母も元は芸者であつたこと、鈴奴だけは堅気に成長させて、健康な人生を終らせようと努力したが、きりよう縹緲はよくても芸者の娘を、しかも合の子を嫁にもらひ手もなく、鈴奴も釜山のある内地人の商人の息子と恋みたいな間柄になりかけたことがあるが、男の親に氣づかれて、手を引いてもらふやうに強談判されたことがあつて、世の中が厭になり、死の家出をしたこともあるが、結局は芸者になつてしまつたと話しつづけた。

鈴与は朝鮮人富豪と日本人芸者の間に生まれた「合の子」で、それが原因になつて日本人との結婚に失敗する。「芸者の娘」と内鮮間の「合の子」という二重の条件によつて差別され、一度は自殺を凶つたすえ、芸者になつたのである。父母の内鮮結婚がもたらした負の側面といえる。父母の内鮮結婚に対する気持ちは次のように紹介されている。

「あの女ひと、ほんとは朝鮮人嫌ひださうですよ。自分の父もとても憎んでゐますの。さうかと言つて、商人の息子とのことや何かあつて、内地人もあまり好いてはゐないし、芸者になつてから、料理屋などで逢ふお客でも品のいい人は

少しいし、それやこれやで年中うつろな気持ちで生きてゐる中、徐さんに逢つて、もう矢も楯もなく好きになつたんですつて。……（後略）」

鈴奴は「朝鮮人嫌ひ」で、朝鮮人の父親を憎み、今は日本人母に抱えられて芸者を勤めている。朝鮮的な血筋への強い嫌悪感をもっているのである。こうした混血児における朝鮮的なものへの嫌悪は、二世にはある程度共通的にみられる文学言説である。

たとえば、金史良「光の中に」では日本人の父親（彼自身も日韓混血児である）と朝鮮人の母親に生まれた山田少年が、暴力的な父を肯定し、愛情を感じながらも朝鮮人母の存在を否定している。つまり日本人への限らない追従と朝鮮人への限らない軽蔑を見せている。同じく金史良「光冥」（一九四一年）では朝鮮人男性と日本人女性の間生まれた娘が朝鮮のことを軽蔑して朝鮮人女中をひどく虐めている。湯浅克衛「棗」（一九三七年）の金太郎も自分を捨てた母への淡い愛情を感じ、金太郎自身は養子縁組により日本籍を得ている。また、前述の「憂愁人生」の「私」は朝鮮人父親とその同僚に「異様な体臭も顔も音声にも毛嫌ひを感じ」たりする。このように、内鮮結婚によって生まれた二世（混血児）は殆どの場合に日本へ傾斜し、その反動として朝鮮的なものを軽蔑し、それから離反しようとする。そうした側面は、「雰囲気」とほぼ同じような設定になっている廉想渉『万歳前』の中でもよく確認することができる。

一九二四年に刊行された『万歳前』は、廉想渉の代表的な長篇小説で、三・一万歳運動以前の朝鮮を描いたものである。<sup>(4)</sup>主人公の李寅華が妻の最後を見届けるために朝鮮に戻るが、そこで「墓地」のような朝鮮の植民地的現実に辟易し、静子が待っている日本に戻ってくる内容である。そして作品には釜山に着いた李がうどん屋の女性従業員たちと長らく話をする場面がある。

李は釜山に着いて駅近くのうどん屋に立ち寄り、三四人の日本女性に囲まれてお酒を飲む。その中に他の従業員から「ちよつと浮いて」みなから虐められている女性がいた。日本人男性と朝鮮人女性の間生まれた女性である。話によると、父は彼女が九歳か一〇歳の時に日本に戻り、母はいま一人で大邱に住んでいるという。彼女は連絡が途絶えた父を捜しに長崎に行きたいという一念で、母親を捨てて家を飛び出してきたというのである。それに主人公の李は思う。

朝鮮人の母親に育ててもらって大きくなりながらも、朝鮮語よりは日本語を話し、朝鮮服より日本の着物を着て、娘として生まれながら朝鮮人の母親よりは日本人の父親を訪ねて行くつもりだというのは、父母に対する子としての情理を超えたある種の利害関係や一種の趨勢という打算が先立つために、別れてからすでに七、八年にもなるという父親をあてもなく訪ねて行こうとしているのだと思う時、この子の運勢がかわいそうだということより、その母親をより一層哀れに思わざるをえなかった。

彼女は日本的な父親に盲目的に追従し、朝鮮的な母親から離反しようとする。金史良「光の中に」の山田少年と同じような心理状態である。こうした盲目的な日本への傾斜と朝鮮的なものからの離反に、主人公は「情理を超えたある種の利害関係や一種の趨勢という打算」と見てとり、彼女を諭して金持ちの朝鮮人と結婚するように勧める。それに対し彼女は、

「ええ、でも朝鮮人は私、嫌いなんです。お金じゃなくて金キンをくれても嫌なの。」

娘は真顔で答えた。朝鮮という二文字は自分の運命に暗い影を投げかける何かの呪文でも聞くように虫ずが走るらしかった。この時、私は東京の静子を思いながら、

「じゃ、俺も失格だな。」と言って笑った。

と、朝鮮人への嫌悪を露わにする。それに「私」は東京にいる静子と自身との内鮮恋愛を改めて思い浮かべる。この後、「私」は妻の葬式を終え、なにかもが厭になった朝鮮を一刻も早く離れ、静子が待っている日本に戻ることと小説は終わる。このように、『万歳前』では内鮮結婚によって生まれた二世が日本的なものに強く傾斜しているが、それは「雰囲気」の鈴奴にも窺える心理である。そうした心理は日本生まれか、朝鮮生まれかにかかわらず、あるいは両親のどちらが何人という構成にもかかわらずに見られる現象である。その背後には差別への反動という側面があり、周りの差別が強ければ強いほど、そうした傾斜と嫌悪が激しく現れているように思われる。

一方で、「雰囲気」での鈴奴は日本人との恋愛に失敗し、朝鮮人の徐に惹かれていく。彼女は料理屋に来ている朝鮮人には傲慢な態度をとるが、徐にだけは激しく惹かれていく。その原因は「徐さんの、女を女とも思はない、ちつとも色眼を使はないところが気に入った」とされている。徐が何かの条件や目的、あるいは優越感で人を見ていないということであろうか。つまり、彼女が混血児で、芸者であることに差別的に接しないということである。不真面目な人であるにもかかわらず、周囲の朝鮮人たちとは違う徐の性格に鈴奴は惚れていたように思われる。あるいは「没落した旧家の当主」という徐の血筋が、混血の鈴奴には心惹かれる原因になったかも知れない。しかし、どちらにしても、鈴奴は日韓の間で混血児としての差別的な条件におかれていた存在といえる。

すでに指摘したように、張赫宙は来日した当初、内鮮結婚の負の側面として二世の問題を扱った作品を連続して書いていく。ちょうどこの時期、張は朝鮮に妻と子供を残したまま野口桂子との恋愛が進展し、長男が生まれている。内鮮結婚による二世の問題が急激に身近なテーマとして浮上したのであろう。そして内鮮混血の問題は「美しき結婚」にも続いていく。

#### 四 「処女の倫理」

長篇連載小説「処女の倫理」は一九三九年四月から八月まで朝鮮の『国民新報』に連載され、同年十一月『美しき結婚』として改稿、改題されたものである。改稿は誤植的な部分に止まり、内容においての異同はほとんどない。「処女の倫理」の連載にあたり、張赫宙は「作者の言葉」の中で次のように述べている。

三年ほど前のことであるが、著者は洪といふ女性の訪問をうけたことがある。彼女は自分の特殊の血統を打明け、種々悩みを訴へるのだがそれは内鮮の合の子である、ことに起因してゐた。このミス洪の他にも、このひとと同じ運命のもとに苦悩の人生を受けついでゐる女性を二三知つてゐたので、著者はそのとき、心ひそかに、いつの日か必ず、これを主題に長い物語を製作する決心をしたのである。

本篇の女主人公、園子が即ちそれらの女性の代弁者であるが、浅野春江によつて、朝鮮で生れた内地人の第二世の人生や、朴礼子によつて、朝鮮娘の生活を描くのが筆者の案である。この三人の娘は夫々の立場で、夫々の悩みを持つてゐる。これを描くことによつて朝鮮の三つの世相を読者に紹介し、何ものか訴へるところがあるように、と、作者は願つてゐる。

作者は「処女の倫理」で内鮮結婚による二世、つまり混血児の差別的な状況に、「三年ほど前」から執筆を「心ひそかに」考えていたという。「三年ほど前」とは、張赫宙が日本に定着した以降のことで、その背景には野口桂子との同棲が影響し

ているかも知れない。さらに張は、「三人の主要人物が悩んでゐるからといつて、この小説を暗いものにはしないつもり」で、「鮮かで麗しい半島の自然のやうに、明るい愉しい物語にするのが、作者の最大の努力であらねばならん」としている。つまり、暗い素材を意識的に「明るい愉しい物語」に「最大の努力」をしたのが「処女の倫理」なのである。作品の梗概は次のとおりである。

朝鮮人を父親にもつ若山園子は父と死別して日本人母の手で育てられ年頃になった。母の若山かね子は愛する娘のために父の金から籍を抜いて良縁を探していた。園子の親友で朝鮮生まれの浅野春江は、父を亡くし母親に育てられたが、母親は財産への欲望から高利貸の高橋の家に後妻にはいり、高橋の息子駒雄と春江も結婚させようとする。春江は駒雄を嫌つて家出をし、青年画家原秀雄のもとに逃避する。春江は原に恋するようになるが、原はちようど訪ねたきた園子に告白する。これに絶望した春江は家に戻り駒雄との結婚を引き受けるが、どうしても気が進まないでいた。自暴自棄になった春江は園子にふられた関口に遊ばれてしまう。いっぽうで園子は静岡の素封家の石原との縁談が進む。しかし、混血児ということで断れてしまう。その中、駒雄は関口を殺傷して自殺し、春江も自殺を図るが間一髪で一命は取り留める。一方で朴礼子は財産家の崔との結婚が決まっていたが、崔は園子の腹違いの妹金香華といきなり結婚してしまう。それに衝撃を受けた朴礼子は修道院にはいる。しかし、話はまた急転換し、一度破談になった園子と石原の婚約は周りの説得で石原家が了解する。また園子の説得で原は春江の病室を訪れ二人もめでたく結ばれることになる。

このように、「処女の倫理」では朝鮮にいる三人の女性の恋愛が描かれているが、その中心は若山園子に置かれている。若山園子は日本人母の若山かね子と朝鮮人の資産家金（名は不明）との間に生まれた二世である。日本人母と朝鮮人父の内鮮恋愛によつて生まれたのである。母は情熱的な女性で、「東京の下町の中産階級のちゃんとした家柄の生れであつて、当時流行つてゐた恋愛の神聖を主張したりして、父との恋愛に生きようとしたのが、半島に来てみると、父には本妻があつ

て、それ以来園子を引き取って別居していたのである。父母の内鮮恋愛は当初から破綻したのである。残されて園子は母に育てられるが名前は戸籍上父の金になっている。それに周りの朝鮮人も園子を金先生と呼ぶ。園子自身も日本の着物と朝鮮服を随意に着る生活に慣れていた。園子自身「朝鮮人にあふときは、一応朝鮮的な感情になり、内地人中にゐるときは、甚だ自然に内地人に帰る」という生活であった。しかし、縁談話がぽつぽつ出始める時期になって、母はある日突然、園子の戸籍を父から抜き、園子を彼女自身の養子にしたと告げる。実の母の養子になることで、金園子から若山園子に戸籍が変わり、名実とも日本人になったのである。日本人との縁談話のためであったが、戸籍変更を済ませた母は園子に「これからは、朝鮮服は着ないで下さい」と厳しくいう。そして翌日早速石原と見合をするが、朝鮮人との混血ということで婚約は一時頓挫する。それに母は大きな衝撃を受ける。婚約が破綻になったとき、母は泣き崩れながら、

「お母さんの人生は、滅茶々々だったの」

母はまた嗚咽した。二十数年前の、娘にかへつてしまったのだ。

「ただ、あなたの生長を——」

と、また嗚咽して、

「楽しみにあらゆる苦悩を堪へて来たの——」

そして、また、嗚咽のやむのをまつて、

「親や、親類からは誹られ、蔑まれても——」

「……………」

「金のほうの家庭からは虐待されながら——」

「社会の人もみな、妙な眼でみますし——」

「……………」

「わたし闘つて来たの。そして、園子さんだけは苦しい思ひをさせまいとしてね——」

「……………」

園子は涙をはらはらと落とした。

「と、思ひましたが、園子さんには、また別の苦しみがありさうだつたの。」

と、彼女自身の内鮮恋愛がもたらした不幸を語り出す。相手の朝鮮人からは騙され、家族と社会からは蔑視され、娘も差別されることになったのである。朝鮮人との混血児ということで娘はまともな貰い手がない。母の若山かね子は内鮮恋愛によって二重の哀しみを味わう。娘の園子さえ日本人と幸せな結婚をさせれば母の内鮮結婚の不幸が慰められると思っていたが、娘はさらなる差別による「苦しみ」を抱えていたのである。

作品では一応、園子は教会の牧師の周旋によって石原の家族から婚約の許しを得ることになる。「朝鮮の事情に疎い」「どうも物わがりの悪い人」の反対を説得できたことになっている。結果的に二人はめでたく、単行本の題目どおり『美しき結婚』を遂げることになるが、それは当初から「作者の言葉」によって予告されたものである。内鮮結婚による多くの不幸を慰め、勇気づけるための操作であろう。創作動機の実態とは違ふこうした無理な「最大努力」によるハッピーエンディング的な設定は、日本人の野口桂子と同棲し、次々と子供が生まれた張赫宙自身の境遇への希望的な願いだっただかも知れない。



## 五 「遍歴の調書」「異俗の夫」「嵐の詩」

作家が内鮮恋愛や内鮮結婚を描くということは、しばしばそうした体験を伴う。内鮮恋愛や結婚を主題にした多くの作品には、それを可能にする作家の体験がある。日韓併合と内鮮一体、あるいは留学や日本滞在によって日本人との恋愛体験が頻繁になり、またそれが発展して結婚に至る。張赫宙もそうした一例に当たる。

張赫宙は一九三六年の夏、「文壇ペスト菌」事件による朝鮮文壇での孤立と白信愛との恋愛事件で行き詰まり、創作の拠点を東京に移す。東京で孤独な生活をしていた張赫宙は野口桂子と相思相愛になり同居生活に入る。朝鮮では早婚による妻がいたが、野口桂子との間に次々と子供が産まれ、事実上の婚姻に至る。そして張赫宙は戦後、自分のこうした恋愛と結婚生活を自伝的小説としてまとめている。「遍歴の調書」「異俗の夫」「嵐の詩」などがそれである。

一九五四年に発表された「遍歴の調書」は、題目とおり、張赫宙自身の人生遍歴と女性遍歴を自伝風に書いたものである。主人公の「私」が妻の圭子と三人の子供を見捨てて愛人の雪枝と恋愛関係になるが、二人の愛情は急激に冷め、「私」が家庭に戻るまでの話の中に、「私」の過去の様々な人生遍歴、女性遍歴が想起される構成である。

「私」は両班出身の名門家庭の父と父の妾の妓生の間に生まれ、妓生の母のもとで少年期を過ごす。妓生の抱え主である母は頻繁に男を変え、それに「私」は周りから散々な差別を受け、性に対する嫌悪感を抱く。そんな私は母の強要で高等普通学校に在学时に結婚をするが、早婚の妻には全く愛情を感じない。妻のことで母との衝突も絶えない。妻に愛情を感じない「私」は妓生との恋愛に耽るがそれも失敗する。次には夫のいる女流小説家白信愛との不倫関係にはいるが、白信愛との不倫関係は彼女の夫に発覚し、姦通罪で告訴される代わりに「私」は国内追放の形で東京に逃げる。すでに作家

としての知名を得ていた「私」は下宿の仕事を手伝っていた山崎圭子との相思相愛になり、二人は同居生活を始める。その中、子供が次々と産まれ、また朝鮮に残した妻と母も死に、「私」は内地籍を獲得する。しかし、戦後になって桂子との関係もぎくしゃくし、「私」はまたもや事務員の雪江に出会い同棲を始める。が、二人の恋愛はすぐに破綻し「私」は最終的に圭子のところに戻ってくる、という内容である。

結果的に「私」は嫌悪していた母の性的な放蕩を同じく繰り返したことになるが、作品でのこうした内容は張赫宙の実際の経歴とほぼ重なるものである。登場人物もほぼ本名で近い形で登場している。そして作品には内鮮恋愛と結婚に対する様々な想念が語られている。

圭子と出会ってまもなく、「私」は上野で一人散歩していた時、圭子のことを思いながら次のような想念に浸る。

私は彼女に近よつていく自分を空想した。が、さういふ風に対照したため却つて自分が異民族であることがはつきりした。同郷の留学生がこの国の女性を伴つて帰国したいくつかの実例を心に描いた。その多くは彼に本妻のあることを偽つて女を手に入れてゐたし、さうでなく正式に結婚した者もその相手は多く盛り場で知り合つた女給か下宿の娘であつた。良家の、ちゃんとした身分の子女は一万に一人の割もなかつた。そしてその多くが不幸な国際結婚に終るのであつた。それは、被統治者にとつてはその宗主国の女性を伴侶とすることに憧れ勝ちであるが、その女性を彼女自身の伝統ある背景に置いて見る時には光つてゐても、違ふ風習の下に移された時光沢が一ぺんに消えてしまふからである。こんなことを考へてゐる自分に気がついて、私はふり出しに戻つて、孤独こそがわが最良の伴侶だと思ふやうになつた。

主人公の「私」がいうように、内鮮結婚には「本妻のあることを偽つて」日本人女性と結婚したケースがしばしば問題になる。それは文学言説にも多く見られる。たとえば、湯浅克衛「棗」での金太郎の父親はそのような典型的な一例であろう。二重結婚によつて混血児の金太郎の運命は大きく翻弄される。廉想渉「南忠緒」（一九二七年）も本妻がすでに別にあり、日本人母は妾になっている。ほかに蔡万植「女人戦記」（一九四五年）、島村利正「高麗人」（一九四一年）、金史良「光冥」（一九四一年）にもそのような要素が見られ、廉想渉「万歳前」、金聖珉「惠蓮物語」にも本妻がいるにもかかわらず日本人女性との恋愛に耽つていくのである。イデオロギー性の強い国策的な作品を除けば、内鮮恋愛や結婚に多くみられるのがこうした二重結婚の問題である。それは朝鮮の封建的な早婚制と近代的な自由恋愛結婚の葛藤から生まれたもので、張の作品に頻繁に登場するテーマでもある。早婚による近代的恋愛の挫折が日本女性との自由恋愛を夢見させるのである。そして内鮮恋愛の対象がしばしば「女給」や「下宿の娘」に設定される。鄭人沢「扶桑館の春」では下宿屋の娘に惹かれる主人公の心情が述べられ、金聖珉「惠蓮物語」（一九四一年）、李孝石「薊の章」（一九四一年）にはカフエの日本女性に、湯浅克衛「棗」には下宿屋の娘に設定されているのである。こうした傾向は「遍歴の調書」の「私」にもそのまま当てはまる。作品での「私」も早婚によつてすでに妻があり、また下宿屋で手伝っていた女性（作品では山崎圭子、野口桂子のモデル）と同棲しているのである。そして作品では子供達が次々と生まれ、「私」は重婚に悩み、先妻との離縁に心を悩める。

このように、「遍歴の調書」では内鮮結婚に至った作者自身の苦悩の話がほぼ実体験として語られている。また作品にはもう一つ内鮮恋愛の実体験が語られている。「私」は女流小説家白信愛と不倫関係が発覚されて日本に追放されるが、白信愛とは実名の女流小説家で二人の不倫は実際にあったものである。「私」は白信愛と密会を重ねるが、その時、白信愛は自分の内鮮恋愛の体験を語り出す。

「ぢや、話題を変へませう。この頃文壇に出た作家の伊川辰造知ってる？」

「知つてますよ。文壇の麒麟児だなんて騒がれてゐるんでせう？」

「伊川さんはあたしのお友達なのよ」

「へえエ、さうかネ」

「嘘だと思つてらつしやるのね。あの方の作品に『射撃をする女』といふのがあるでせう？

「知らないね」

「あの作品は『早稲田文学』にのつただけ、あたしのことを書いてゐるの」

「ほんたうですか」

「ほんたうよ。今度うちにいらつしやい、見せて上げるわ。それから最近『文芸』に書いた『鳳仙花』よんだ？」

「伊川さんの？」

「さう。あれもあたしよ」

「さうすると、伊川はあなたに惚れてたわけだ？」

「まあ、さうだわね。あたしのアパートに何度も来たわ。夢中だつたらしいの」

白信愛(1908～1939)は「コレイ」(一九三四年)「赤貧」(一九三四年)など朝鮮農民の貧困を扱ったリアリズム系統の小説を主に書いた女流小説家である。<sup>(5)</sup>一九二九年「私のオモニ」を書いて文壇に出た白信愛は、三〇年に一時日本に渡り、当年帰国したが親が決めた結婚に反対して再度渡日し、演劇などに傾倒した。三二年また帰国して翌三三年に銀行員と結婚したが、愛情のない結婚生活に満足できず、当時、日本文壇で注目を受け始めた張赫宙との不倫関係に落ちいった

のである。この不倫関係の清算のために張赫宙は渡日を余儀なくされ、彼女は離婚することになる。

白信愛は日本滞在の時にカフェの女給などを転々としながら男性遍歴を重ねていたと思われるが、その一人が当時日本文壇で注目を浴びていた石川達三であった。作品での「伊川辰造」というのは石川達三のことで、『早稲田文学』に載った『射撃をする女』とは『新早稲田文学』（一九三二年八月号）に掲載された「射撃する女」のことである。『文芸』に書いた『鳳仙花』とは『文芸』（一九三八年新年号）に掲載された『鳳青華』のことである。二人の不倫は「鳳青華」より以前の事件で、実際の白信愛が作品名まで言い出すことは不可能であるが、作品ではそのように設定されている。

石川達三「鳳青華」は主人公の「私」が日本名の「松浦百合」を名乗る朝鮮女性に散々翻弄されたあげく、二人の恋愛は破綻してしまう内容である。最初、彼女は日本名を名のり、ウラジオストク（白信愛の小説「コレイ」はウラジオストクを背景にしている）生まれだと言い張っていたが、「私」の追及について紙の上に「朝、鮮、人！」と書いてぼろぼろ涙をながす。この事件をきっかけに二人の力関係は微妙に逆転し、恋愛は破綻してしまうのである。つまりある程度順調だった恋愛に、朝鮮人という認識が介在した途端、亀裂が発したのである。素性がばれた彼女は「私」の結婚の申し込みに突発的な行動を重ね、ついには帰国してしまう。内鮮恋愛と結婚における朝鮮女性の羨望と憧憬の心理と、そこに介在している日本男性の差別意識によって恋愛は挫折するのである。同様の心理的な力関係は「異俗の夫」にも確認できる。

\*

\*

\*

一九五八年五月に『新潮』に発表された「異俗の夫」は、日本女性と結婚した朝鮮人の「私」の微妙な心理的な機微が描かれている。作家の自伝的な作品で、「遍歴の調書」とも重なる部分が多いが、ここでは主に内鮮結婚がもたらした習慣の違い、心理的な力関係、それによる「私」の文学的な変質など、内鮮結婚の多様な側面が体験的に語られている。

「私」は「異民族の夫ではないつもり」で妻の国である日本に同化しようと努力するが、習慣の違いとそれによる差別

感で苦しむばかりである。同居当初は監視の刑事から、「お前ら、半島の者は、内地の女を妾にするが、帰る時は、捨てていつちまう。純情な内地女をだましおつて、怪しからんぞ」と言われたりする。しかし、こうした外部の圧迫より内鮮結婚の困難さは「心の中に根を生やして」いた。習慣の微妙な違いが衝突を招き、それが民族的な相違にエスカレートしていく。その都度、妻は殊更に民族的な相違を際立たせ、結婚生活はしばしば危機を迎える。たとえば、妻の親戚の葬儀に参席できなかったことに、妻は「民族が違うと、こうもしきたりに行違いがあるのか」と不満を言い、それに「私」は激怒する。

だから、そのことは、私という人間の特殊な性格に因るのであつて、決して民族を云々する事柄ではない。一個人の異常性格をそのまま民族の特性と押しつけ、民族的侮蔑を加えることへの兼ね兼ね憤懣を抱いていた私は、私のその憤りを知っている筈の妻が、いと簡単に、民族を持ち出したことへ、怒りが燃えしきるのを覚えた。そして、その憤りのあとから、いかに同化しきつたと自負しても、この憤りそのものが、やはり民族の残滓なのかと呆れた。

が、そのことに気がついていながら、妻が私に民族の侮蔑を与えたことへ更に憤りを積み重ねて、「やつぱり別れたほうがよい」と思つた。

「私」の並々ならぬ努力にもかかわらず、習慣の相違によるすれ違いが民族性に飛び火し、終局には朝鮮民族性の欠陥として現れてくるのである。「私」はそれをつねに意識し、また過剰に反応する。そしてこうした過剰意識が「私」の文学世界にも影響し、作家的な方向を大きく屈折させることになる。

私は、作家としてデビューした当時かなり騒がれ、その後十年間は、とも角上り坂だった、と自負している。それは、私という作家の出身の特殊性と、書くものの民族性が珍しいから、少しおまけがついて、実力以上に認められて居つたことは知つている。が、とも角私がその特色を保つていければよかつたものを、それを塗りつぶして、同化へと方向を変えたことから、作家的特長を失い、そして下り坂へ向つたと見てよい。同化しきつたあとへ特長を失えば存在価値はないわけであり、点も甘くはつけられないからである。

私がなぜ自分が初期に掲げた民族という看板を私の店頭から引き下ろしてしまい、自分から墓穴を掘るような真似をしたか？ その答は、妻だ、と思つていた。だから、ああいう乱暴な言葉が吐き散らせたのである。

内鮮結婚が民族性への過剰意識をもたらし、「私」はますます日本文化と日本語に執着していき、ついに文学的特徴さえ失つてしまったのである。こうした「私」の告白は張赫宙自身の切実な訴えのようにも思われる。「私」は張赫宙の日本語と日本文化への異常な追究は内鮮結婚の心理的な圧迫がもたらしたものと推測できる。そうした心理的な過程は、朝鮮の出自でありながら日本の美意識を追究していった戦後の立原正秋にも見ることができかも知れない。

このように、「異俗の夫」では内鮮結婚によって背負う周囲の差別に加え、当事者の内面的な屈折過程が事細かに描かれている。むしろ内鮮結婚においては周囲の差別より当事者の心理的な屈折による不幸の側面がより強いといえる。その屈折はつねに朝鮮人側にのしかかる。朝鮮民族性の劣等性、民族性の欠陥という形で朝鮮人側が差別を負わされ、その民族性に縛られて屈折していく。こうした傾向は内鮮結婚を扱った多くの小説に共通に見られる現象でもある。内鮮結婚において朝鮮人の方はいつも民族性、しかも民族の欠陥性を背負う、個体ではなく集団（民族）として見られている。そしてそれは文学言説だけではなく、張赫宙の自伝から見るように、実際においても同様に存在するものであったと思われる。

そうした心理過程は「嵐の詩」にもみられる。

\*

\*

\*

「嵐の詩」は張赫宙の分身である龍Ⅱ「私」の少年期から敗戦までの半生を描いた自伝的作品である。作品では若干の年代的な錯誤はあるが、ほぼ張赫宙自身の経歴と重なっている。そして作品では朝鮮女性の真珠との結婚、日本女性の愛との出会いと恋愛、同居と結婚生活が描かれている。

龍は幼年期を慶州に過ごした後、大邱の父親に引き取られて公立高等普通学校を卒業する。卒業後は富豪の家に家庭教師をする傍ら、アナキズムに傾倒しながら自堕落な生活をする。その時に妓生の姉である真珠に紹介され、凶らずも夫婦の関係になる。

そのひとの兄が万歳騒動のあと行方不明になり、それがもとで両親が悶死し、のこされた姉妹のくらしの苦労がどんなものか、良家の子女が妓生になるなどその零落の悲しみを乗り越えての、光りを龍に求めた真珠の悲願なのだ。真珠の髪上げ儀式に手を貸した龍はただそれだけの形式の、かりそめの夫のつもりだったが、真珠はその時、心も、そして、はからずも身もささげた。

「髪上げ儀式」とは未婚女性の印である下げ髪を簪をさして上げ髪にする儀式で、新郎がする行為である。それで真珠は龍を夫と思うが、龍にはその意識と責任感が薄く、日本文壇に華々しく登場して東京に居を移し、料亭の仲居の仕事を手伝っていた日本人女性愛と相思相愛の関係になる。愛との同居に際し、龍は愛に東京郊外の神社に連れていかれる。そこでいきなりの結婚式が行われる。



愛はきつと龍に眼をやつて、

「よろしいのね？」

「……………」

龍は頷いた。

二人は昇殿を許された。龍は心の目を閉じて何も考えまいとした。それは真珠の声がその心にひびいて来そうだったからである。奥のほうに御簾が垂れ、神官はそちらへ向いて拝礼とかしわ手をくりかえした。そして、やおら二人の前に膝行してきて、御幣をふり、拝礼をして、それから祝詞を読んだ。祝詞の中に龍は自分の名を聞き、その誓いへ次第に心が動いていった。

これが定めだったのか？ 龍は真珠が雲の上へ遠ざかりそのひとが背負っている山や川も姿をかくすのを見た。

このように、愛との内鮮結婚をとおして龍は日本へ強く傾斜していく。真珠の存在は遠のき、それと同時に真珠が背負っている朝鮮の自然からも情的に遠のいていくのである。そして愛との結婚によつて子供が次々と産まれ、龍は子供をとおして日本語の世界に没頭し、日本語の背後にある日本精神を発見していく。つまり日本への同化を實踐していくのである。内鮮結婚による日本への同化は内鮮結婚を扱ったほとんどの作品に見られ、その方向が朝鮮になることはあまりないが、「私」もそうである。

一方で、龍が日本女性と結婚することによつて朝鮮に残された真珠は孤独な生活を余儀なくされる。そこへ龍が仕事で朝鮮に久しぶりに戻ってくるが、その龍に対し、真珠は「あちらの女は浮気っぽく色気が滴るとか。あなたを亡ぼすでしょう」と激しく批判する。それに龍は腹を立てて反論し、口論が激しくなる。

「真珠が考えているようなそんなものではない。あんたはあちらから帰った留学生のことばを真に受けている。カフェーや喫茶店の女としか交際しなかった狭い経験。そんなのを真にうけては……」

「そうでしょう！ 何もかも、あちらのものはよくてこちらは悪いのですか？ そんなにも母国を侮辱なさって、よいものでしょうか？」

龍は愛との関係を弁護するために内鮮恋愛の典型的なパターンを指摘する。朝鮮人留学生と「カフェーや喫茶店」の日本女性との組合せである。内鮮恋愛の不均衡性で、良家の日本女性と朝鮮人の結婚は難しいという差別認識がその前提にある。龍は料亭の仲居をしている愛を良家の婦人と認識し、それを真珠に抗弁しているが、そこには当時に普遍的に見られる内鮮結婚への憧憬と羨望の心もない交ぜになっているようにも思われる。

このように、龍の日本への傾斜は内鮮結婚によって強まり、二世の誕生によって言語と文化へその傾斜はますます強化されていく。そうした中で真珠は不幸な死を遂げ、龍は完全に朝鮮的な束縛からも逃れることになる。そして日本の敗戦を迎え、龍の決心は固まる。満州取材から逃げるように日本に戻った龍は新宿駅で玉音放送を聞き、日本人になることを決心する。

龍は熱い陽差しをまともに顔に受けていた。眠りからさめながら、

「ぼくはこの国の人になる」

それは予定されたことのようにだった。がふと、よくよく被占領国に縁があると思ひ運命を感じた。

龍は「この国の人」になることを決心し、愛の待つ疎開先に帰ることで作品は終わる。愛の待つ家に帰ることと「この国の人」になることが重なっていくのである。今まで朝鮮人と日本人との宙ぶらりんの状態にいた龍は敗戦を迎え、日本人として生きていくことを決心する。そうした決心に至らせたのが家族の存在である。それはまた内鮮結婚によって自然と導き出された結果でもある。作品での龍の選択は、紛れもなく張赫宙自身の選択であったと思われる。そうした意味で、「嵐の詩」は内鮮結婚によって導き出されて最終的な到達点が描かれているといえる。それはまた単に文学体験だけではなく、実際の生の人間の貴重な植民地体験であったに違いない。

## 六 おわりに

結論に先立って一つ指摘しておきたいのは、内鮮恋愛と深く関連する問題として、新女性への傾斜がある。張赫宙の多くの作品や自伝的な小説には必ずといっていいほど新女性への傾斜が見られる。新女性に対する恋愛への願望と情熱である。父母が結婚相手を決める旧式の結婚に反発し、自由恋愛の精神性に基づく新女性との恋愛と結婚への希求なのである。張赫宙の自伝的な系統の作品には早婚の本妻を捨て、新女性へ傾斜し、それが母との摩擦を起こす図式がある。こうした新女性との自由恋愛と結婚への希求は、張だけではなく、一九二〇年代から三〇年代の韓国近代文学の全般に見られる思想風潮である。本妻を捨て自由恋愛に傾斜するのが知識人の文化現象であった。しかし、ここで指摘したいのは、新教育によるいわゆる新女性が、日本的な性質のものであるということである。日本的な近代教育を受け、日本から渡来した近代的な恋愛の文化現象を体得し、東京発信の新文化層によって生まれた女性こそ新女性である。つまり、新女性の具現体はあくまでも日本的な女性であり、新女性への傾斜は日本女性への欲望の代替的な性質を強くおびている。つまり、旧女

性／新女性の対立はそのまま朝鮮女性／日本女性の対立構造になる。新女性への希求がしばしば東京帰りの女性に向けられ、内鮮恋愛の対象がカフェや喫茶店の日本人女給に向けられるのは、同じ心理的な傾斜といえる。その点、一九二〇年代から三〇年代に風靡した自由恋愛と新女性への憧憬は内鮮恋愛と内鮮結婚への願望と同じ系統にあり、日本的な女性像の投影があり、内鮮恋愛と結婚を生み出していく土壌でもあったといえる。

さて、張赫宙の作品から内鮮恋愛と結婚の問題について考察してみたが、張が内鮮結婚の問題を扱ったのは渡日以来の、野口桂子との恋愛と同棲の後になる。そして作品は主に内鮮結婚による負の側面として二世の問題が扱われている。「憂愁人生」「雰囲気」「美しき結婚」などはいずれも二世の差別的な状況が描かれ、また内鮮結婚の形態も朝鮮人男性と日本人女性の組み合わせになっている。これには、野口桂子との同棲、長男や次男の誕生など、内鮮結婚による二世の誕生が張赫宙の新たな自己問題になったことと関係しているように思われる。

一方で、戦後で書かれた自伝的な作品「遍歴の調書」「異俗の夫」「嵐の詩」などでは、内鮮結婚によってもたらされた自己内部の心理的な機微が描かれている。内鮮結婚によって二世が誕生し、日本語への傾斜はますます強まる。しかし、日本語への傾斜は張赫宙文学の朝鮮的な特徴を無くし、作家的には閉塞していく。内鮮結婚が日本語への傾斜をもたらし、日本文化への傾斜に赴かせ、最終的には日本への同化を導き出していく。そのような心理的な過程を張赫宙の戦後の自伝的作品は物語っている。その点、内鮮恋愛と内鮮結婚はいつも植民地宗主国に還元されるもので、被植民地に還元されるものではないといえる。それを文学的にも個人的にも体験したのが張赫宙であったように思われる。

- (1) 日韓における内鮮結婚と内鮮恋愛の文学言説については、拙稿「内鮮結婚の文学」、『多分化社会における〈翻訳〉』筑波大学文化批評研究会編、二〇〇〇年六月）に詳しい。拙著『近代文学の〈朝鮮〉体験』（勉誠出版、二〇〇一年一月）に収録。
  - (2) 本論での張赫宙の年譜的な事項は白川豊『張赫宙研究』（東国大学大学院博士学位論文、一九八九年度、朝鮮語）を参考にした。なお、日本語による年譜は南宮鎮・白川豊編著『張赫宙日本語作品選』（勉誠出版、二〇〇三年一〇月）に白川豊「張赫宙略年譜」がある。
  - (3) 前掲の白川豊『張赫宙研究』には「月姫と僕」「愛怨の園」に対する日本側の厳しい評価が紹介されている。
  - (4) 『万歳前』の書誌的な事項は廉想渉・白川豊訳『万歳前』（勉誠出版、二〇〇三年一〇月）の解説を参照にした。なお、本論での引用も同書によるものである。
  - (5) 白信愛に関する先行研究としては徐正子「白信愛小説研究」、『院友論叢』第二輯、一九八四年、淑明女子大学大学院）、金潤植「白信愛研究抄」、『慶山文学』一九八六年）があり、年譜的な作業としては金潤植編『白信愛小説集コレイ』（朝鮮日報社、一九八七年）が詳しい。徐は白信愛を「女性の問題、女性の意識を掘り下げて女性の存在と実在を描いた作家」と評価している。一方で、金は白信愛を「最初の抗日女流作家」として位置づけ、「日帝時代のどの朝鮮作家にも劣らない、尊敬に値する行動と優れた作品を書いた愛族文学家であり、農民作家」であると賞賛している。そうした評価の根拠になるのが白信愛の「朝鮮女性同友会」での活躍、シベリア放浪（金潤植はこの時期に逮捕されて受けた「日本警察の残忍な拷問によって不妊の身」になったとする）、日本滞在、伝統的な結婚の拒否と離婚などである。
- しかし、白信愛のシベリア放浪、日本滞在、離婚などについては未だに殆ど明らかにされていないが、その一部様子は張赫宙「月姫と僕」（一九三六年）「遍歴の調書」「異俗の夫」（一九五八年）、石川達三「鳳青華」「射撃する女」から窺うことができる。シベリア放浪は張赫宙「月姫と僕」や石川達三「鳳青華」に紹介されている。それによると、思想運動の目的で密航し、同志と一緒にウラジオストクに行ったが、同志に裏切られて監禁され、仲間にレイプされて妊娠中絶をしたと推測される（「射撃する女」にも思想運動の仲間の子供を産んだことになっ

ている。それぞれ作者の違う二作はその内容の前後関係がほぼ一致しており、少なくとも日帝の拷問による不妊とは関係がないように思われる。また日本滞在の様子は「鳳青華」と「射撃する女」から窺うことができる。それによると彼女は、日本名で素性を隠し、厚化粧をし、多くの男性と交渉をもち、日本人の年寄りから妾の誘惑を真剣に考えるなど、まさに自由奔放な生活をしている。さらに彼女の離婚は、伝統への反抗という精神的なものではなく、張赫宙との不倫によるものと思われる。張赫宙「遍歴の調書」「月姫と僕」「異俗の夫」などによれば、自信愛の自由奔放な行動に張は誘われるように、彼女の果樹園で密会を重ね、それが夫に発覚され裁判沙汰になるところ、仲裁によつて張赫宙は国内退去になる。彼女の離婚はこの不倫事件が大きく関係しているように思われる。また彼女が張を誘惑したのは、「このへんで一ばん頭の良い人の胤をもらへる」という、なんとも理不尽な理由からであるとされている。もちろん、こうした自信愛の造型はあくまでも小説の中で描かれたもので、それがそのままの彼女の実像と一致するものではないかも知れない。しかし、日韓それぞれの二人の作家の彼女に対する描写がほぼ一致し、それがまた彼女の経歴とも符合している。また張赫宙の二作がほぼ自伝的な作品で、石川達三は自己体験を忠実に描く作家として知られている。その点、小説で描かれた自信愛の姿は彼女の実像に非常に近いものだったと思われる。

一方、自信愛のシベリア放浪については彼女自身の日本語によるエッセイ「わたしのシベリヤ放浪」(『国民新報』一九三九年四月、四五号、日本語)がある。他に日本語による創作としては「春光を浴びて」(『国民新報』一九三九年四月、第二号)、「旅は道連れ」(『国民新報』一九三九年七月、第一四号)などがある(布袋敏博『『国民新報』と植民地末期の朝鮮文壇』『語研フォーラム』第二〇号、早稲田大学語学教育研究所、二〇〇四年三月、を参照)。しかしながら、自信愛の朝鮮語による創作にはシベリア体験や日本体験、あるいは離婚のことについてはなにひとつ書かれていない。白の短い人生の中でもっとも強烈であったはずのいくつかの体験が文学作品として全く内面化されていなのである。そのため、彼女の数少ない作品は個人的な体験とかけ離れ、貧困や男性の暴力に喘ぐ女性像が現実認識を伴わず無造作に現れている。また意外にも、彼女の作品には男性の不倫に苦しむ女性の姿がよく描かれ、それは不倫事件以降も続いているが、彼女自身の放蕩な生活と不倫による離婚を考えるとその文学的な精神性と成熟性には疑問を持たざるを得ない。文学的な内面性の不在である。も

ちろんこうした文学的な内面性の不在は、朝鮮近代文学の成熟性、作家の内面性、さらには近代朝鮮語の思想性の問題が大きく介在しているといえる。それらを抜きにして白信愛を「女性の存在と実存」を描き、「尊敬に値する行動と優れた作品を書いた愛族文学家」で「日本警察の残忍な拷問によって不妊の身」になった「最初の抗日女流作家」といったような評価はただ空しい。